飼育レポート/

新サル舎に導入したサルのお迎えや、 展示に向けた準備、引っ越し後の様子 などをレポートします。

パパイヤのお迎え

2020年10月25日の夜、新サル舎に迎えるフクロテナガザルのパパイヤの引き取りと、飼育研修のため、私とスタッフ2人が愛知県の日本モンキーセンターに自動車で向かいました。10時間後に無事到着し、パパイヤと初対面。パパイヤの印象は、活発に動き回り、担当者の言うことを理解しているのか、とても素直な性格に見えました。担当者に確認したところ、私の印象どおりの性格で人にも慣れているようです。研修では、エサや薬の与え方などを教えていただきました。驚いたのは、サル同士はよくお互いのエサを取り合いますが、フクロテナガザルは2頭並んで争わずに自分に与えられたものだけを食べていました。

秋田への帰り道、はじめは不安そうに鳴いていたパパイヤでしたが「怖くないよ、大丈夫だよ」と声をかけて、しばらく経つとおとなしくなり、エサも食べてくれました。新サル舎の入居第1号となったパパイヤ。飼育が始まっても素直という印象は変わりません。これからよろしくね。

飼育展示担当 斎藤 勇



パパイヤの搬入 (10月28日)





新サル舎での展示に向けて

新サル舎での展示に向けた最初の作業は、旧サル舎から工事が完了するまでの仮住まいへの50頭近いサルの移動でした。これは長年の経験を持つベテラン飼育員でも一度あるかないかの大仕事でしたが、2019年11月に無事にサル達の移動が終了し、2020年10月に新しいサル舎が完成しました。

ここからが次の作業の始まりです。動物の特性をお客様により楽しく見ていただくため、まずは室内展示場の整備を始めました。

新サル舎で初めて飼育するフクロテナガザルの展示場では、他の動物園の視察や情報交換、飼育研修などを参考に、テナガザルの特徴であるブラキエーション(両腕で交互に枝をつかんで移動すること)ができるロープやつり革などの取付けを行いました。

また、ワオキツネザルの展示場には、ジャンプ台、空中 ブランコなどを段違いに設置し、数メートルもジャンプ する凄い運動能力を見てもらえるようにしました。

サル達の特徴に合わせた室内展示場の整備が終わると、仮住まいからサル達を新居に移す作業です。これも前回の移動と同じく大仕事となりました。

新サル舎は、3月20日のオープンに向けて準備作業が続いていますが、見学するお客様とサル達に喜んでもらえるよう、これからも展示の工夫を続けていきます。

飼育展示担当 鈴木昌典



ロープで遊ぶフクロテナガザル



ブランコなどが設置されたワオキツネザル展示場

お引っ越し後のサルたち

いよいよ新しいサル舎に入居したサルたち。エリマキキツネザルやワオキツネザルは、以前から暮らしていた個体同士で移動したため、新しい環境に慣れるまで、さほど時間はかかりませんでした。

一方、フクロテナガザルは、オスの「パパイヤ」は愛知県の日本モンキーセンターから、メスの「ワタル」は長崎県の九十九島動植物園森きららからやってきた初対面同士です。このような場合、一緒に暮らす仲間になれるかどうかの相性を見るため「お見合い」の期間を設けます。動物は人間よりずっと力が強く、万が一ケンカなどになった時は、お互いに大怪我をする危険性があるため、お見合いでは動物の表情や動きをよく観察しながら少しずつ両者を近づけていく必要があります。

昨年11月の来園時に隣り合った別々の部屋に入ったパパイヤとワタルは、初めは互いに緊張感こそありましたが順調に距離が縮まっていき、最終的には飼育員が「今日のお見合い時間は終わり」と言っても2頭がくっついて帰っ

獣医師 湯澤菜穂子

てこない、というくらい仲良くなりました。同居が成功した 2頭、今後もどんどん仲良くなって赤ちゃんが誕生してく れることを願っています。



すぐに仲良くなったパパイヤ(左)とワタル

アフリカゾウ「だいすけ」の治療

獣医師 小川裕子 飼育展示担当 山上 昇

アフリカゾウの「だいすけ」は、1990年に南アフリカ共和国から当園にやって来ました。グレープフルーツとバナナが大好きな31歳のオスです。数年前から少しずつ、右後肢の足根関節(くるぶし部分)が内側に変形したことで、体重を支えるために反対側の左後肢にも負担がかかっている状態です。2019年10月からは右後肢内側に腫脹病変があり現在も治療しています。

そのような状況の中、2020年10月上旬には、だいすけは自ら屋外展示場に出なくなりました。痛みがあるからなのか、精神的な不安からなのか理由ははっきりわかりませんが、現在も検討を重ねながら可能な限りの治療を行っています。

治療は、ゾウ担当者がゾウに指示を出しコントロールすることで可能になるため、獣医師とゾウ担当者がチームになり協力して行います。内服薬は、好物に入れて与えるなどゾウに不信感を持たれないよう工夫して行っています。

10月下旬の夜、よろけて後傾になり倒れそうになっただいすけの姿をモニターで見た時は焦りました。足が悪いゾウが倒れてしまうと自力で立ち上がる事が難しいからです。倒れて動けなくなると、血液循環が悪くなる他に体の維持に重要な腸管の動きが悪くなり、最悪の場合、死に至ります。幸いにも、後肢を踏ん張り体勢を立て直し倒れませんでしたが、それから何週間も気が抜けない日々を過ごしました。

だいすけの体調を回復させるため、最も工夫していることはエサの内容です。動物園では主に乾牧草のほか、リンゴ、ニンジン等の根菜類も与えています。季節により生草や園内の樹木から枝葉も剪定し食べさせていますが、樹木の種類も限られるため、冬期間は笹竹類が頼りになります。チームで協力し、免疫力アップや良いウンチが出るように、新鮮な竹や木を毎日給餌しています。だいすけは、竹や木は驚くほど豪快にバキバキ音を立て食べ、良いウンチをしてくれるので、担当チームみんなが喜んでいます。

だいすけは11月からは体調も安定していますが、1日も早い完全回復を目指し、これからもチーム一丸となって頑張ります。



体調が安定しエサを食べるだいすけ



変形した右後肢